

水稻種子処理技術を普及

新たな塗抹手法考案

バイエルクロップ

バイエルクロップサイエンス（東京都千代田区）は、水稻種子処理技術に関するサービス拡充に力を入れる。同技術はあらかじめ種もみ（種にする米）に種子処理剤と種子被覆剤をコーティングすることで防除効果を付与し、種まき後の防除作業を省力化できる。農業人口の減少や農地の大規模化といった課題に対するソリューションとして知られる。種子処理技術センター（千葉県柏市）で新たな塗抹方法の開発に注力するとともに、デジタル技術を用いた処方の提案を推進することで、より分かりやすく、使いやすい種子処理方法を確立し、普及を加速させる。2026年1月にはウェブアプリをアップデートし、害虫の選択項目を増やす方針。

デジタル活用処方も

バイエルは世界に複数の種子処理技術センターを設置している。各地域の特性に合わせ大豆や小の種子処理をメインとする。表などの種子処理技術センターは日本のみと、14年に開設し、他



ミキサーで簡単に薬剤を塗抹する

の作物で培われた種子処理技術を水稻に応用するべく、研究開発を重ねてきた。17年に水稻種子処理技術に対応する薬剤を市場投入した後は、より効果的で省力化を実現するサービスおよびソリューション開発に軸足を置き、残効性を発揮する。塗

抹作業はミキサーに種もみと薬剤を入れて、回転させた後、乾燥させるだけ。同社の星加貴久水稻殺虫・殺菌剤マネジャーは「簡単かつ確実で経済的」と強調する。農閑期である冬に薬剤処理できるため、繁忙期である春先の作業を減らせる。移植栽培だけでなく、今後の普及が期待される直播（直まき）栽培にも活用できる。

現在、主流の移植栽培において、種子処理済みの種もみには箱処理剤は不要。播種量が変わっても種もみに対する薬量は一定なので、効果が安定する。種子処理剤の使い方が、箱剤と比較して薬剤使用量を90%以上削減できる。

省力化などの側面から今後の普及が見込まれる直播栽培においては、鉄コーティングなど、主要なコーティング資材と併用できる。農閑期に処理することで本田の病害虫

防除を省力化する。

バイエル シードグロースでは殺虫剤1品、殺菌剤2品の計3製品を用意しており、これらの組み合わせで各現場に対応できる。組み合わせや塗抹方法は常に新しい手法が考案されており、同社の営業マンを通して顧客やユーザーに伝えている。ミキサーなど新規の種子処理機の考案や、種もみネットとの併用など、より使いやすい手法の確立に力を注ぐ。

さらに、薬剤の組み合わせ作業を簡便化するため、デジタル技術の活用を推進し進める。最適な除草剤の処方提案をサポートするウェブアプリ「my防除」に、バイエル シードグロースの処方提案に対応した種子処理機能を追加した。種子処理機能を追加したことで、育苗期から田植え後の本田の雑草管理や、初期害虫・いもち病・紋枯病などの病害虫防除まで、一気通貫したソリューション提案が可能になる。農家はアプリ上で移植または乾田直播を選択した後、地域など各設問に答えていくと、最適な薬剤のレシピが提示される。農家ごとにテーラードメイドした処方を提案すること、農家の省力化に貢献する。26年1月には病害虫の選択項目が増え、より使いやすいシステムにアップデートされる予定だ。